

回収・再生・再利用の環を完成させるためのツールということで誌名を「RING」としました。
これはリサイクルが始まっていることを意味する「R・ING」からイメージしたタイトルです。

44

2026年6月
発行

特集

未来を担う子どもたちへ！ PETボトルリサイクルの 環境教育、最新事例の紹介



PETボトルをテーマとして学ぶ 環境教育の需要が高まっています。

PETボトルリサイクル推進協議会では、従来から教育現場で活用できるさまざまなツールを提供してきましたが、25年度は、新たにデジタル教科書ポータル「EduHub」に参加し、新たな教材開発の提供も開始しました。

今号では、当協議会の取り組みと教育現場からのお声をお届けします。



Contents



PETボトルリサイクルの
メールニュースを
配信しています

当協議会ホームページにて
登録ができます。

■ 資源循環型社会形成を目指して 福島県 郡山市 ～市町村紹介～ 兵庫県 宝塚市	6 7
■ 再商品化事業者紹介 株式会社サーキュラーペット	8
■ PETボトル再商品化施設一覧 2026年度の登録リサイクル施設 新認定再商品化製品のご紹介	9
■ 再生樹脂利用事業者紹介 ブルドックソース株式会社	10
■ 会員企業訪問 小林容器株式会社	11
■ 環境配慮設計認定制度／編集後記	12

PETボトルリサイクルの環境教育、最新事例の紹介



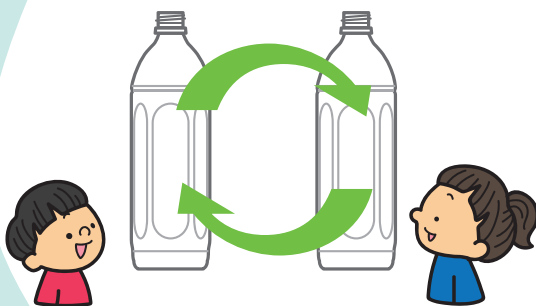
PETボトルリサイクル推進協議会では、PETボトルのリサイクル啓発活動の一環として、子ども向けの環境教育に力を入れています。特にPETボトルは子どもにも身近な存在であることから、PETボトルを通じてリサイクルの仕組みや資源の有効活用について学んで欲しいという教育現場のニーズも高まっています。

これまでポスター、子ども向け小冊子、動画などを制作し、自治体のリサイクルプラザや学校でご活用いただいておりますが、25年度はさらにデジタル教科書ポータル「EduHub®（エデュハブ）」向けに、PETボトルのリサイクルの仕組みや大切さについて学べる小学生向け教育教材「リサイクル探検隊！『大変身するペットボトルのすごさを周りの人に伝えよう』」を制作しました。今後もより多くの皆さんに実際の授業の中でPETボトルのリサイクルを学べる機会を提供してまいります。

小・中学生向け冊子「だいすきPETボトル」を配布

小・中学生向けに制作した学習資料です。まずは、製造工程や種類・特長などの観点からPETボトルの基礎を解説し、その上でリサイクルのながれや分別に必要な手順、収集・加工後どのような製品へ再生されるのかを、簡潔にわかりやすく紹介しています。キャラクターや図解、クイズを取り入れることで、親しみやすく、楽しみながら学べる内容を目指しました。

公式WebサイトではPDF版を公開しており、自由に閲覧・ダウンロードが可能です。また、学校や団体には、ご要望に応じて印刷冊子の提供も行っています。



出前授業を実施

SDGsや環境学習への関心の高まりを背景に、より身近な題材であるPETボトルリサイクルへの注目が集まっています。

当協議会では「事業者に直接、話を聞いてみたい」との要望に応え、依頼のあった学校を対象に「出前授業」を実施。授業では、回収された使用済みPETボトルから作られたフレークや再商品化製品を実際に紹介しながら、リサイクルの仕組みを分かりやすく解説しています。さらに、児童との質疑応答を通じて「PETボトルは大切な資源である」という理解を深めていただく機会を提供しています。



2つの啓発動画を公開

PETボトルリサイクルをより広くご理解いただくため、主に小学生向けに2本の啓発動画を公式Webサイトに公開しています。

1本目「知ってほしいペットボトルのこと」では、オリジナルキャラクターが先生役となり、分別方法やリサイクル工程を分かりやすく解説。2本目「クイズで学ぼう!! PETボトルリサイクル」では、出演者がクイズに答えるQ&A形式で、知識を深められる内容です。いずれも図解や実際の工程シーンを交えており、リサイクルの仕組みを詳しく、かつ直感的に理解できる構成となっています。



「知ってほしいペットボトルのこと」



「クイズで学ぼう!! PETボトルリサイクル」

「子どもとためす環境まつり」などのイベントに出展

前年までは協賛として参加していた東京都中央区環境保全ネットワーク主催の「子どもとためす環境まつり」に、2024より出展しています。親子連れを中心に、PETボトルリサイクルに関するクイズ企画を実施。環境意識の高い来場者からは、日本の国内リサイクル率の高さに大きな関心が寄せられました。

また、「エコプロ」などの他イベントにも継続して出展しており、若年層にリサイクルの仕組みを直接伝える貴重な機会となっています。今後もこうした活動を通じ、PETボトルの再資源化に関する普及啓発に一層取り組んでいきます。



ご希望の自治体・団体にポスター、実験キットなどを配布しています!

PETボトルのリサイクルについて知識を深めていただくため、ポスターや冊子、実験キットを準備しています。

ポスターは2種(分別の啓発(左 A1サイズ)、PETボトルリサイクルの流れ(右 B1サイズ))を、2024年にリニューアルしました。

ご希望の場合は、当協議会にお問い合わせください。



小学生向けEduHubの教材を制作

PETボトルのリサイクルについて学ぶ機会を提供するため、国内唯一の教科書ポータル「EduHub」にて教材を制作・掲載しています。

この教材を通じて、教育現場の先生や子どもたちがPETボトルリサイクルに関する正しい知識を身に付け、資源循環について主体的に考えるきっかけとなることを目指しています。

EduHubの教材構成

タイトル: **リサイクル探検隊!**

「大变身するペットボトルのすごさを周りの人に伝えよう」

対象学年: 小学校4年生

対象科目: 社会科「ごみの処理と利用」

概要: 身近な存在であるPETボトルが、単なる「ごみ」ではなく、未来へと繋がる「資源」であるという新たな価値観を発見することを目指します。本教材を通し、PETボトルが身の回りにあるさまざまな製品(服、文房具、自動車部品など)にあれこれ変わる、という驚きの変身を遂げることを学び、リサイクルし続けようという気持ちを育みます。



指導案

ワークシート



授業スライド



先生の 便利ポイント

- 授業ですぐに使えるよう、指導案、ワークシート、授業スライドが一式利用可能です。
- 理解がより深まるよう、工場のリサイクル工程を分かりやすい授業動画にしました。
- 比重分離を観察できる実験キットをご希望の学校にお届けします。

EduHub とは?

主要機能
無料

POINT 1 デジタル教科書のセットアップをサポート!

POINT 2 異なる発行者の教科書が同じ画面で使える!

POINT 3 こどもたちの興味関心を広げる!

教科書発行者などで構成する「一般社団法人こども未来教育協議会」が普及支援するデジタル教科書ポータルであり、2024年3月よりスタートしました。

「EduHub」に対応する全ての教科書・教材が一覧表示される「本棚機能」、児童生徒のアカウントを一括発行できる「登録支援機能」により、教員の事務負担軽減などを実現。多くの方にご活用いただき、申込数は70万IDとなりました。

EduHubのお申し込みは自治体単位でお受けしています。学校でご利用を希望される場合は教育委員会へご相談いただき教育委員会経由でお申し込みください。

問い合わせ先

<https://eduh.jp/support/customer/>



学校での環境教育について教えていただきました

東京都 福生市第五小学校

東京都から1972年に愛鳥モデル校の指定を受け、以前から自然や環境への関心が高い同校。「EduHub」の制作会社とのつながりも背景に、今回は4年生の社会科授業にて、当協議会のPETボトルリサイクル教材を活用した授業が実施されました。

授業は、教員の円滑な進行のもと、動画やクイズを効果的に織り交ぜた構成となっており、生徒たちも理解を深めながら意欲的にリサイクルの仕組みを学んでいました。今回授業を担当した教員や校長からは、内容の難易度は適切との評価があった一方、1時間の授業時間では情報提供が中心になりやすく、児童が自ら思考・議論する時間の確保が必要との指摘がありました。



今後はこの貴重な意見を反映させ、児童がより主体的に理解を深められるような教材を目指して、ブラッシュアップを図っていく方針です。

兵庫県 宝塚市長尾中学校



授業で使用したスライド(抜粋)

宝塚市理科教育委員会および阪神理科教育研究大会の一環として、宝塚市立長尾中学校にて2025年、PETボトルのリサイクルをテーマとした公開授業が実施されました。

この授業では、主にPETボトルのリサイクル方法や、多様な製品へと再生される仕組みが紹介されました。生徒たちは再生品の実物を手に取ることで、身近な容器が全く別の素材へと姿を変える様子を実感し、関心を示していました。特に、定規やクリップといった製品への再生はイメージしやすかった一方、繊維への再生過程については想像しづかったようです。この課題に対しては、担当教員が工夫を凝らして「手作りの簡易綿あめ機」を用いた実験を導入して、熱で溶けた樹脂が繊維状になる様子を擬似的に体験させることで、生徒たちの理解を助けていました。

本授業の後、宝塚市内の多くの中学校から実験キットの問い合わせが寄せられるなど、教育現場での関心が高まっています。当協議会では、今後も学校教育との連携を通じて、PETボトルのリサイクル率向上と持続可能な社会の実現に貢献してまいります。

神奈川県 横須賀市浦郷小学校

海洋ごみやプラスチック問題を学んだ小学5年生児童から「なぜPETボトルはプラスチック素材が良いのか」との問い合わせがあり、当協議会の事務局次長が学校を訪問。面談にて、PETボトルの優れた特性や、環境負荷を抑えた代替容器を実現することの難しさを解説する機会となりました。

これを受けて児童たちは「PETボトルを正しく分別することが海洋ごみ削減につながる」と自ら結論付け、散乱ごみ対策として、正しい分別を促す「透明リサイクルボックス」を考案。多言語表記のデザインも合わせて、授業内でこれらのアイデアはプレゼン資料として発表されました。



授業での様子(上)

2人が考案した「透明リサイクルボックス」(右)



福島県

郡山市



郡山市の人口は約31万人。東北の最南端・福島県のほぼ中央に位置しており、優れた交通網から人や経済・工業・流通が交差する要衝として「陸の港」とも称される中核市です。郡山市では、2016年度比で2027年度までにごみ排出量の20%削減を目標に掲げ、みんなで目指す「郡山ごみ減量20%」をスローガンのもと、ロードマップに基づいた具体的な施策を実施・展開しています。



市内の施設などに掲示される郡山ごみ減量20%のポスター

市民・事業者・行政が一丸となったリサイクル活動を目指す



富久山クリーンセンター内の手選別作業



15個を1ユニットとして保管されるベール



富久山クリーンセンター内の体験型学習コーナー

郡山市では、2000年4月の容器包装リサイクル法の完全施行にともない、まずは2週に1回PETボトルの単独回収を開始。その後、増加傾向にあった排出量に合わせて、2003年4月から週1回の回収に変更されました。収集場所は、自治会約3,700箇所、マンションなどの集合住宅約2,100箇所を合計した約5,800箇所あります。PETボトルはキャップ・ラベルをはずし、中身を軽くゆすいで潰したものを透明または半透明の袋に入れて排出します。

市内には2箇所のクリーンセンターがありますが、富久山クリーンセンター内のリサイクルプラザでPETボトルの中間処理を行っています。ここで破袋、選別（担当スタッフ2名による手選別）、ベール化までが行われ、通常PETボトルのベールは1個約15kg。輸送のため15個を積み重ね、1個に梱包されます。収集量が多い場合は、約1.5m四方の大型ベールにする場合もあります。なお、この富久山クリーンセンターでは施設の見学会も実施しており、体験型学習コーナーでは、クイズなどの体験も可能となっています。

今後の課題と啓発活動

郡山市は、東日本大震災をきっかけにごみの排出量が増加し、そこから高止まりが続いている状況です。PETボトルの分別においては、可燃ごみへの混入や事業

系一般廃棄物として排出されてしまう事案、収集日を誤って排出されてしまうケースなどが見受けられます。こうした実情を改善するためにも、さらなる周知と継続的な啓発は必須です。

そこで市では、チラシやポスター、PR動画による啓発活動を行っています。市役所西庁舎1階ロビーと5R推進課窓口にて「ごみ減量シール」を配布しており、これをごみ箱に貼って視覚的に訴え、分別意識と減量行動の定着を図っています。

また、Webを活用した周知にも力を入れ、ごみと資源物の分別方法や収集日などに関する情報を網羅した「郡山市ウェブサイト」のチャット機能や、品目で分別方法などの情報を得ることができる無料サイト「こおりやまごみサク」で検索可能となっています。加えて、スーパーの店頭回収や民間業者が設置した資源物回収ボックスなどを掲載している「資源物回収スポットマップ」では、一覧の店舗名をクリックす

ることで、資源物回収スポットの位置情報や収集品目が表示されるようになりました。

回収機会の拡張としては、2021年12月に郡山市は大手コンビニチェーンとの包括連携協定を締結。市内のコンビニ店舗にはPETボトル回収機が常設されており、広く市民に活用を呼びかけています。

市内の小学校と5R推進課との協奏事業「ごみ減量教室」から、環境教育への取り組みも行っています。これは小学4年生を対象とした出前授業で、2025年度には15校761名に向けて実施。PETボトルの分別体験などを通じて、リサイクルに関心を持つきっかけとして反響をいただいています。併せて企業や団体など、大人を対象にした講座も開催されています。

「人」「モノ」「情報」がつながり、交流によって発展を続けてきた郡山市。市民・事業者・行政が一体となって高い意識を育み、今後もごみ減量と循環型社会への推進を目指していきます。

(取材日：2025年12月17日)



(左から) 伊東氏、佐藤氏、岡部氏、柳沼氏

- 郡山市役所 環境部
- 5R推進課 課長
- 伊東 洋祐
- 資源循環課 課長
- 佐藤 伸治
- 資源循環課
- 富久山クリーンセンター所長
- 岡部 成利
- 5R推進課 課長補佐
- 柳沼 洋史

兵庫県

宝塚市



「歌劇と温泉のまち」で知られる宝塚市の人口は約22万人。市域は南北に細長く、主に大阪・神戸のベッドタウンとして宅地開発が進む南部市街地と、豊かな自然に囲まれた北部の田園地域から成っています。宝塚市は2025年3月に飲料メーカー、石油関連企業と「宝塚市における循環型社会の実現に関する連携協定」を締結。3者が相互に協力・連携することで、持続可能な資源循環型・脱炭素社会の実現を目指しています。

連携協定で実現するサーキュラーエコノミー

宝塚市におけるPETボトルの単独回収は、容器包装リサイクル法の施行に対応するため、1999年4月から開始されました。ボトルはキャップ・ラベルを外し、軽くすすいで潰した後、透明または半透明の袋でゴミステーションに排出されたものを月2回、パッカー車で回収。分別ルールが守れていない袋には、啓発用シールを貼り付けた上での取り残しを採用しています。



クリーンセンター内PETボトル保管場所

中間処理を行うクリーンセンターでは、破袋から選別まで手作業で行い、ベール化していましたが、2024年から建て替え工事ともなう仮設運用となり、選別・圧縮は外部委託で実施中。現在、宝塚市新

ごみ処理施設整備・運営事業として、民間業者が施設の整備・運営を包括的に行うDBO（設計「Design」、設計「Build」、運営「Operate」を一括して委託）方式を採用しています。現在焼却棟が建っている場所に新リサイクル棟を建設するため、リサイクル棟は2031年竣工、完成後は従来通りセンター内で破袋からベール化までを行う予定です。

今後の展望に向けた環境教育

宝塚市の循環型社会に向けた協定締結は2段階で行っており、前述の飲料メーカー・石油関連企業との協定に続き、飲料メーカー・中間処理企業・商社との水平リサイクルに関する協定も締結されています。

2026年度より、PETボトルはボトルtoボトルのリサイクルに移行。市が選別・圧縮を実施して、配送・原料製造は委託企業、飲料メーカーがリサイクルボトルの使用・販売を行います。また、市内で出た家庭用の廃食油も回収。これは飛行機燃

料(SAF)に活用され、製造時にPETボトルのもととなる原料も同時に生産されます。

こうしたPETボトルのリサイクルには、やはり市民の協力が不可欠であり、「環境学習及び啓発・周知活動に関すること」にも事業者と連携・協力して取り組んでいます。現在、クリーンセンターが建て替え中のため、小学生向けの施設見学は休止中ですが、その代替措置として、スケルトンパッカー車を活用した出前講座を実施中。2025年10月からは、飲料メーカーの専任講師が、ボトルtoボトルで資源を循環させる仕組みを学習するプログラムを開催しています。

使用済みのPETボトルが、新しいPETボトルとしてリサイクルされる水平リサイクルは、市民への説明も明確で、理解を得られやすいシステムです。この度の協定締結により、循環型社会に向けた具体的な取り組みが開始でき、大きな一歩を踏み出すことになりました。

(取材日：2025年12月15日)

選別・圧縮の中間処理を行う株式会社ダイシン（兵庫県川西市）

手選別作業員：6人
処理量：12.5トン/日
ベールサイズ：約200kg(約1m x 1m)



(左から)岡田氏、古田氏、田路氏

宝塚市役所 環境部
クリーンセンター管理課
課長 古田 健
係長 浜崎 尚子
係長 岡田 真由子
係長 田路(とうじ) 敏幸

宝塚市理科教育部署会の取り組み

宝塚市は2022年度より新ごみ処理施設(クリーンセンター)の建設を進めており、新ごみ処理施設では、ケミカルリサイクルを行う施設が建設予定です。市からクリーンセンターの新しい焼却炉の説明を受け、中学校理科担当教員の組織、宝塚市理科教育部署会は、このことを理科の授業に取り入れる活動を行いました。

この活動と宝塚市立長尾中学校での2025年度の阪神地

区6市1町の理科担当教員や教育委員会の方々が集まる阪神理科教育研究大会で、PETボトルのリサイクルについての公開授業が行われました。このことにより、当協議会に宝塚市内の中学校数校より資料、サンプル依頼があり、提供しています。

長尾中学校については特集「未来を担う子供たちへ！ PETボトルリサイクルの環境教育、最新事例の紹介」のP5をご覧ください。



株式会社サーキュラーペット

豊かな地球環境を未来へつなぐ ボトルtoボトルで目指すサーキュラーエコノミーの確立



喜田 代表取締役

株式会社サーキュラーペットは、総合環境ソリューション企業のヴェオリア・ジャパン合同会社、三井物産株式会社、株式会社セブン&アイ・ホールディングスの三社合弁事業として、2020年4月に設立。サーキュラー型のビジネスモデル実現を目的に、2024年3月に竣工しました。

従来、キャップやラベルがついたまま、もしくは飲み残しがあるなどの事業系使用済みPETボトルは品質が低いためリサイクルは困難とされてきましたが、当社はそれらを「ボトルtoボトル」に使用可能なPET樹脂として再生できる高水準の技術を持っています。

サプライヤー・地域と環境課題を共有 多数のパートナーシップを構築

工場の立地に関しては、取引する飲料メーカーのアドバイスを参考に西日本を選択。交通の利便性や電力・水設備の整備、地域住民への説明会などで熱心にご協力いただいた岡山県の津山市に決定しました。今や地域との連携なくして、環境負荷の低減、脱炭素化の推進は有り得ないと考えています。

原料となる使用済みPETボトルは、西日本の鉄道会社など環境課題を共有するサプライヤーとのパートナーシップを構築した事業者からの調達を含む事業系からの調達を主にしていますが、その他に、日本容器包装リサイクル協会からの購入、津山市など市町村の独自ルートからの調達もあります。

当社は事業系使用済みPETボトルを高品質に再生可能にする技術を保有しており、製造ラインの自動選別機では、選別されたボトルを再度確認するリカバリーラインを設置。他に手選別を2か所設置しています。再生PET樹脂の生産能力は年間2.5万トンです。

サーキュラーペットの合弁三社はそれぞれの役割を担っています。グローバルで環境課題に取り組んでいるヴェオリアは、水や廃棄物、エネルギーの分野でビジネスを展開、プラスチックリサイクル事業を中核の一つとして、世界10か所以上の拠点でPETボトルのリサイクル工場を運営。そこで培われた設備選定や技術・ノウハウの提供を行っています。三井物産は、幅広い事業資産などを活用し、PETボトル原料の確保と製品販売を中心に貢献。セブン&アイ・ホールディングスは、店舗での

使用済みPETボトルの回収、再生PET樹脂をオリジナル商品に使用することで、普及の一端を担っています。

進歩と環境保全の両立を目指す

当社の存在意義は、飲料メーカーに使用していただける品質の提供が大前提ですが、継続する課題はあります。まず、日本での再生PET樹脂マーケットは、メーカーによって使用する品質が異なる現状にあること。また、消費者のPETボトルの品質・リサイクルへの理解や意識変化も必要になってくると思います。

本格稼働を経て実感しているのは、納入されている事業系のベールが、当初の想定よりも品質が良いということ。それは、中間処理事業者の努力によるものと考えています。こうした地道な活動に応える意味でも、さらなる意識向上・技術向上に取り組んでまいります。そして未来世代につなげていくため、再生PET樹脂全量の「ボトルtoボトル」を目指し、循環型経済（サーキュラーエコノミー）の確立を推進します。

(取材日：2026年2月25日)

代表取締役 喜田 知克

販売・調達・経営企画本部長 満澤 貴弘

株式会社サーキュラーペット

住所：岡山県津山市くめ字団地50-77

設備稼働：2024年3月

設備能力：再生樹脂生産量（飲料ボトル用）：2.5万トン/年

URL：<https://cpet.co.jp>

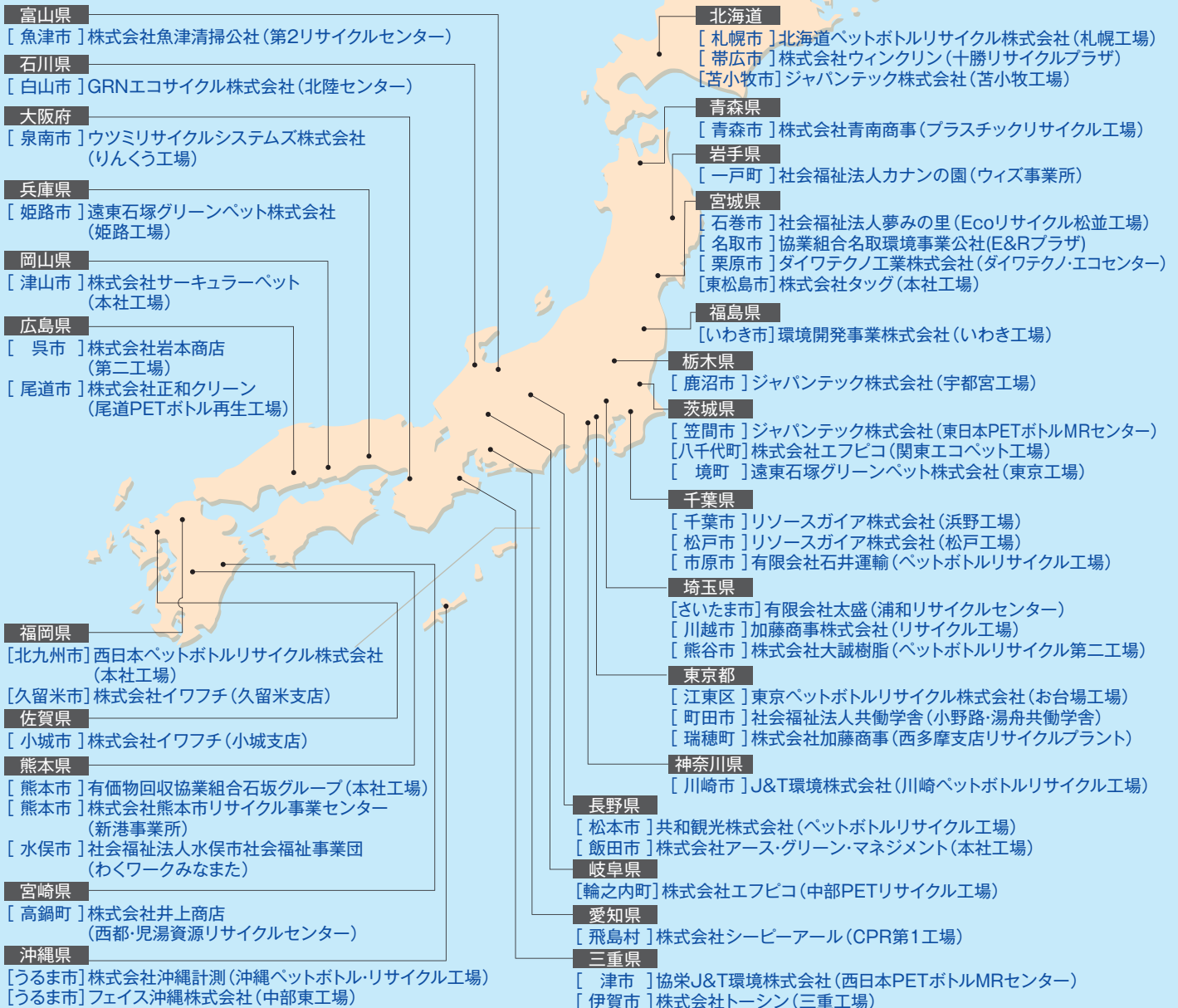


処理を待つ保管されるベール



洗浄工程後の事業系PETボトル

2026年度の登録リサイクル施設は全国で40社46施設



新認定再商品化製品のご紹介



PETボトルリサイクル推奨マークは、回収された使用済みPETボトルを25%以上原料としているなど、PETボトルリサイクルに寄与している商品を対象としています。

推奨マークのついたPETボトル再利用品は、Webカタログでご紹介しています。

PCもしくはスマートフォンよりご覧ください。 <https://www.petbottle-rec.gr.jp/product/catalog/>



PETボトル協議会が2025年4月～2026年3月末までに、新たに「PETボトルリサイクル推奨マーク」の使用を認定したPETボトル再利用品をご紹介します。

エヌ・ケイ・プランニング株式会社
ステッカー



エバラ食品工業株式会社
焼肉のたれ
「焼肉堪能 甘旨醤油味」
「同 炙り醤油味」
※400グラムのみ



株式会社登喜和工業
冷蔵庫マット



株式会社東北タチバナ
PET食品容器ボトルシリーズ



福德長酒類株式会社
本格焼酎「博多の華」



創業以来120年受け継ぐ「食のしあわせ」 長期ビジョンから見据える進化

ブルドックソース株式会社

ブルドックソース株式会社の創業は1902(明治35)年。「幸福感を味わえる商品の提供」を経営理念に、人々の「食の幸せ」に寄り添い、国内ソース市場のリーディング・カンパニーとして安全・安心を提供し続けています。同社では、食品業界の環境変化に対応し、成長を続けるための戦略としての長期ビジョン「Bull-Dog Global Innovation 2032」を掲げ、世界的ブランドを目指す中で、循環型社会の実現に向けた商品の開発・設計・見直しを積極的に進んできました。

国内トップメーカーから世界ブランドへ 新たな定番に挑戦する

ブルドックソースがリニューアル容器の開発に着手したのは、2018年。それまで使用されてきた四角い容器は、50年以上もの間、国民的に慣れ親しまれてきた商品です。ブルドックソースを象徴するブランド・アイデンティティとも言える容器のリニューアルは、当然ながら並大抵のことではなく、設備投資にかかるコスト面からも、当初は社内での反発もありました。しかし「Bull-Dog Global Innovation 2032」で掲げた世界ブランドとしての成長に向けて、資源循環の推進は不可欠であり、避けることのできない挑戦でした。

「ひとにも、環境にもやさしく」をコンセプトに、2020年には最有力候補となる容器が誕生。その後の開発では、使いやすさと強度は相反するという課題に直面し、硬すぎず、柔らかすぎない絶妙な使用感を念頭に研究を重ねました。また、開発スタッフ以外の社員を対象に、容器を自宅に持ち帰ってもらい、より消費者に近い観点からワンプッシュでの液量調整や液ダレ・液汚れの防止策などで、調査協力を得ました。さらに、一般のお客様にもご協力をいただき、使用感調査も経て、ようやく完成へと至りました。

そして2023年9月、新容器での商品販売が開始されました。「ワンウェイプラスチック使用量削減2025年度目標15%」を見据え、再生PET樹脂を利用。家庭用ソースカテゴリーの売上を牽引する定番ソース3種の300ml、500mlの2タイプで「PETボトルリサイクル推奨マーク」を登録しました。また、



容器開発に携わった中尾氏



再生PET樹脂を利用する
定番ソース3種の500mlタイプ

プラスチック使用量を20%削減している点で、リデュースにも繋がっています。

形状は上部が円筒型、下部が四角となっており、ブランドイメージとして従来の容器(四角)をオマージュしたデザインとなっています。開けやすく、持ちやすく、使いやすく。ブルドックソースの企業スローガン「食の幸せのとなりに」を象徴するかたちとして、ブルドックソースブランドの新たなアイデンティティとなることを目指しています。

自主基準による目標を定め リサイクルシステムを構築

現在も引き続き、容器の開発にはこだわりを持って取り組んでいます。ラベルはまだ再生材ではありませんが、ミシン目の入ったシュリンクラベルにすることで剥がしやすく、廃棄する際の分別がしやすくなっています。また、印刷にはバイオマスインキを使用して、環境配慮に対応しています。

今後の課題として挙げられるのは、ソースはノンオイルながら容器に匂いが残る場合が多く、リサイクルの観点から、分別がPETではなく、その他プラスチックの扱いになってしまっている点です。ソース容器をPETとして分別区分して活用するには、リサイクル工程で匂いを取り除く技術が必要であると考えています。

また、今後はリサイクルに関連した社内教育や、未来を担う子どもたちへの啓発活動にも力を入れていきたいと思っています。そしてより一層、環境への配慮を深め、食を通じて持続可能な社会の実現に貢献してまいります。

(取材日:2026年3月11日)

商品企画部 課長 松嶋 麻由子
主任 中尾 真之
経営企画室 課長 小林 方子
主事 佐藤 聡子

ブルドックソース株式会社

本社：東京都中央区日本橋兜町11-5
創業：1902(明治35)年
設立：1926(大正15)年
従業員数：214名(2025年3月末時点)
URL：<https://www.bulldog.co.jp>

創業85年の実績 容器・包材の総合商社

小林容器株式会社

小林容器株式会社は、1941年より大手乳製品メーカーの空堀回収業から始まり、1951年に法人化。食品用途をはじめ、医療品やコスメティック、工業用途まで、さまざまな容器を開発・販売するトータルパッケージの総合商社として、2026年9月には創業85周年を迎えます。

PETボトルに関しては、リサイクルが本格化された1993年に大型ボトル、容器包装リサイクル法が適用された1997年より小型ボトルの取り扱いを開始。プリフォームを製造する会社や、ベール化する中間処理業者などをグループ関係会社に持ち、循環型社会に向けた商品づくりでもその実績を重ねてきました。



自社で販売する容器を利用し商品化

トータルパッケージ・ソリューション 価値を包み、魅力を届ける

小林容器株式会社は、素材選びや形状・機能設計だけでなく、箱詰め、発送までを考慮したパッケージを提案する企業です。良い商品であっても、必ず売れるとは限りません。容器や包装材は、その材質や形状により、保存期間や耐久性、さらには物流コストも変わってきます。手に取ってみたいくなる、買ってみたいくなる。パッケージには、その魅力や心配りを伝える義務があると考えています。

トータルパッケージの仕組みとして、素材選定や成形(プリフォーム)から実際の充填工程や梱包、物流に関する相談までワンストップで対応するため、複数の業者調整にともなう手間や納期、品質などへの懸念を軽減できます。また、過去の事例に準じた試作などから、売れる商品づくりのアイデアを提案。例えば、乳製品メーカーの容器は現在、プラスチック製となっていますが、当社にはその開発に参画して得たノウハウがあります。そして量産・出荷に至る実務支援、製品化までの実績に基づいた課題解決においても、強みを発揮できます。

より軽く、より強く。PETボトルは、形状の改善や減量化が進んでおり、トレンドを見逃すことはできません。循環型社会の実現に向けて、リサイクル技術も進歩し、リサイクル率も年々高くなっています。当社では飲料用、調味料用など、小ロットから大ロットまで、幅広く対応しています。また「耐熱・耐圧・耐熱圧」タイプ、「角形・丸形・他角形」タイプについても各サイズを取り扱っています。もちろん、特注品や新型の

開発、機能性・用途に合わせたキャップ、PET素材の包装材・ラベルなど、多様なニーズに応えるべく、これまで技術を磨いてきました。

消費ではなく循環へ、「未来」へ向けた活動

当社は2024年9月、10月のNPBクライマックス・シリーズにて、東京ドームへの広告を出稿しました。目を引くバックネットに広告があったため、TVや新聞で見た取引先などからの反響も上々で、初見の方にも知っていただける良い機会となりました。

また、環境への取り組みとして、FSC(Forest Stewardship Council: 森林管理協議会)のCoC認証を取得。FSC認証は環境、社会、経済の便益に適い、管理された森林からの生産物や、その他リスクの低い林産物を使用した製品を目に見える形で消費者にお届けする仕組みとなっています。

カーボンニュートラルへの第一歩として、年々「容器包装廃棄物」の減量化、再資源化は急務となっています。資源をただ消費するのではなく、4R(Reduce、Reuse、Recycle、Renewable)の活動によって循環させていくサーキュラーエコノミーの実現は、容器の総合商社である当社こそが推進すべく努めであると考え、今後も積極的に取り組んでいきたいと思っています。

(取材日：2026年2月18日)

専務取締役 滝澤 聡
取締役 営業本部長 織茂 良紀



織茂取締役

小林容器株式会社

住所：東京都新宿区早稲田鶴巻町549-5
創立：1941(昭和16)年
設立：1959(昭和34)年
従業員数：25名
URL：<https://kobayashi-youki.co.jp>



プラスチック資源循環促進法における設計認定制度がスタートしました

プラスチック資源循環促進法における設計認定制度

環境配慮設計認定制度は、2022年4月に施行されたプラスチック資源循環促進法に基づいて制定された「プラスチック使用製品設計指針」に則したプラスチック使用製品のうち、特に優れた設計製品について主務大臣の認定を受けることができるものです。

2026年1月、清涼飲料用PETボトルは、認定基準の第一弾となる4つの製品分野のひとつ*として施行されました。

※他の認定対象の製品分野：「文具」「家庭用化粧品容器」「家庭用洗浄剤容器」

清涼飲料業界では、関連団体であるPETボトルリサイクル推進協議会により30年以上前より、再生利用が容易な製品の設計として「指定PETボトルの自主設計ガイドライン」を制定、運用を行い、いち早く環境配慮設計の取り組みを業界全体で進めてきました。さらにガイドラインは、リサイクル適性に特化した規制のため、国で定められた指針を補完し、環境配慮設計を進める際に検討すべき事項を具体的にまとめた「PETボトルの環境配慮設計指針」を2024年2月に策定しました。

当協議会ホームページ「PETボトルの環境配慮設計指針」
<https://www.petbottle-rec.gr.jp/guideline/guidelines.html>



日本コカ・コーラ株式会社



サントリー食品インターナショナル株式会社 (認定当時)



大塚製薬株式会社



アサヒ飲料株式会社



株式会社伊藤園

今回の環境配慮設計認定基準においては、認定を受けるため製品のライフサイクル全体で環境負荷を低減する設計が求められています。設計認定を受けるにあたっては、(1) 総合的な評価および情報などの公表 (2) 製品分野ごとに別に定める基準 (認定基準) に適合していることが求められており、清涼飲料PETボトル容器については、全国清涼飲料連合会、PETボトルリサイクル推進協議会において、国との議論を重ね、今般設計認定基準を以下の通りの内容で公表されました。

清涼飲料用PETボトル容器の設計認定基準

要求事項1：PETボトルリサイクル推進協議会が策定する指定PETボトルの自主設計ガイドラインにおける必須事項のすべての項目を満たすこと

要求事項2：年間ベースのボトル平均重量が、用途・容量別に定める軽量化基準を満たすこと

要求事項3：再生材またはバイオマス素材を年間重量ベースで15%以上使用していること

2026年2月10日付けで認定を受けた清涼飲料用PETボトル容器は5社18製品 (以下の製品はそのうちの一部)。

PETボトルリサイクルに関するニュースピックス

容器包装の3R推進に係る八団体で構成される「3R推進団体連絡会」(ガラス、PET、紙、プラスチック、缶、アルミ缶、紙パック、段ボール)は、この度、第5次の5か年計画に当たる「自主行動計画2030」を策定しました。その中で弊協議会は、従来の3R推進目標項目に加えて、資源循環の本質である“石油由来樹脂の使用量削減”をメインターゲットに掲げました。

編集後記

今号の特集としては、PETボトルリサイクルの仕組み、資源の有効活用などの子供向け環境教育の現場を通して最新の教材や学校での授業について紹介しました。

市町村紹介では「郡山ごみ減量20%」をスローガンのもと、市民・事業者・行政が一丸となってリサイクル活動を行っている福島県郡山市、飲料メーカー・石油関連企業と協力して「持続可能な資源循環型・脱炭素社会の実現」を目指し活動している兵庫県宝塚市を取り上げてきました。また、再商品化事業者紹介では、リサイクルが困難とされる事業系使用済みPETボトルに関し「ボトルtoボトル」に使用可能なPET樹脂に再生できる高水準の技術を持っている株式会社サーキュラーペットを紹介しました。(T)

PETボトルリサイクル推進協議会 会員団体

一般社団法人 全国清涼飲料連合会

PETボトル協議会

一般社団法人 日本果汁協会

日本醤油協会

酒類PETボトルリサイクル連絡会

全国みりん風調味料協議会

一般社団法人 日本ミネラルウォーター協会

発行人 PETボトルリサイクル推進協議会

〒103-0001 東京都中央区日本橋小伝馬町7-16 ニッケイビル2階
TEL 03-3662-7591 / FAX 03-5623-2885

編集・制作：株式会社MD

